

## 義堂周信『空華日用工夫略集』の

### 主題に関する覚書

朝倉 和

#### はじめに

恩師位藤邦生先生の数ある御業績の中で、稿者が最も影響を受けたのは、『看聞日記』をはじめとした漢文体の日記に文学性を追究されたことである。稿者は、五山文学を研究の対象として来た関係上、禅僧が記した日記を繙く機会が多い。禅僧の日記は勿論、漢文で記されている。そこで今回、小論を執筆させていただくに当たって、借越ながら試みに禅僧が記主である漢文体の日記を、文学的な視点を以て読み進めてみたい。なお、本稿中で引用する先生のご論考はすべて、『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）による。

#### 一 『空華日用工夫略集』について

—— 成立・諸本・体裁・翻刻・注釈等 ——

本稿で取り上げる禅僧の日記は、義堂周信（一三二五〜八八）の『空華日用工夫略集』（以下、『略集』と略す）である。義堂は土佐

の出身で、早くから夢窓疎石（一二七五〜一三五一）に師事し、後に関東に下向して、常陸勝楽寺・善福寺・瑞泉寺・円覚寺黄梅院に住し、また、報恩寺を開いた。晩年は上洛し、建仁寺・等持寺・南禅寺等に住した。五山派の中で最大派閥である夢窓派の中心人物で、公家や武士とも親交が厚く、文学にも秀でており、絶海中津（一三三六〜一四〇五）とともにその漢詩文が「五山文学の双璧」と称されていることは有名である。詩文集は『空華集』。

稿者は、長らく絶海の履歴や作品を研究して来た。したがって義堂の『略集』は、研究に際しての、言わば、座右の書と言つても過言ではない資料である。ここで、敢えて「資料」と記したのは、飽くまでも、主として自身の意見を援用する形でしか活用して来なかったからである。しかし、一方で『看聞日記』に遜色が無いほどの「面白さ」を覚えたことも、また事実である。今回はその辺りを追究したいと考え、『略集』に注目した。勿論、義堂が、五山禅僧の中で最重要人物であることも、注目した大きな理由の一つではある。

『略集』の成立に関しては、玉村竹二氏「空華日工集考」別抄本及び略集異本に就て——（『日本禅宗史論集』下之一所収、思文閣出版、昭和五十四年）に詳しい。『空華日用工夫集』即ち原日記（現在は散佚）は、初め四十八冊あったらしく、そこから著者義堂が自分の年譜を作成するのに適当な部分を抄出したものを、義堂が示寂した後、その門弟が一応の形に纏めたという。さらに氏は、そこから複雑な過程を想定されているが、今は省略する。現在では、書き

入れ補遺の処理方法によつて、二系統の伝本が報告されている。一方は南禅寺慈氏院本や相模瑞泉寺本や内閣文庫本等の流布本、一方は建仁寺両足院所蔵の異本系統本である。なお、両足院には、『略集』とは全く別に、瑞溪周鳳が原日記から記事を抄出した『刻楮』や、『空華日用工夫集別抄』とも言つべき『日功集』という書物もある。

玉村氏は、『略集』の流布本の体裁を、四分類されている。失礼を顧みず、大胆に要約すると、次のようになる。

- 一、正中二年より暦応四年迄。義堂の手に成らざる部分。義堂の逸事を記すが、古老よりの聞書と思われる箇所が多い。
- 二、康永元年より貞治五年迄。義堂の手に成る事は明らかであるが、いまだ日記体ではなく、自曆譜体の追憶記である。
- 三、貞治六年より嘉慶二年三月十一日の條の前半迄。義堂の眞の日記であり、大体日々記し続けて、その病篤くして執筆不可能に陥る日迄に及ぶ記事の抄出である。
- 四、嘉慶二年三月十一日の條の後半より同年四月四日迄。義堂危篤により、恐らくはその門弟が後に書き加えたと思われる部分である。葬送仏事・遺言及び略伝の附記がある。

また、『略集』の翻刻や注釈は、以下の通りである。なお、番号や記号は、私に施した。以下同じ。

①『續史籍集覽』第三冊（近藤出版部、昭和五年）

↓校訂の方針は詳かならず。巻末に「明治二十七年十月 近藤瓶城 校點」という注記がある。

②辻善之助氏『空華日用工夫略集』（大洋社、昭和十四年）

↓一定の底本を定めず、流布本系の諸本を相互に参看しながら校訂する。当時、両足院所蔵の異本三本は未発見。

③蔭木英雄氏『訓注 空華日用工夫略集——中世禪僧の生活と文学——』（思文閣出版、昭和五十七年）

↓内閣文庫本を底本とし、南禅寺慈氏院本（大洋社より刊行）によつて校訂し、建仁寺両足院所蔵別抄本（『日功集』、朝倉

注）により適宜補う。原漢文を書き下し文に直す。

稿者は今回、本文の引用は、③の書き下し文に拠る（傍線や波線は、私に施した。また、送り仮名や句読点等を、私に改めた箇所がある）。次頁以下で『略集』を文学作品としても読み得ることを提唱したいと考えるためである。ついでに、『略集』の主題を明らかにする方向で論を進めて行くが、その読解にあつては、原文を示すよりも、公刊された訓読文を示す方が、むしろ効率的であると考へたからである。なお、『略集』の二系統の伝本には、作品の読解に支障を来すような差異は無い。

二 『略集』を文学作品として読むためには

位藤先生と福田秀一氏の間には、「日記文学観論争」と言うべきものがあつた。日記文学の条件として、両氏とも、「一、年月を追つて記してあること」「二、自己の体験・見聞とそれに伴う感情・思想を吐露したもの」という二点においては同意見のように思われるが、

三点目として福田氏が「三、文学としての意識をもって創作されたもの」とされるのに対して、先生は「日記文学とは、日記であつて文学になつてゐるもの」(傍点は私に施した)と規定される。さらに、「文学作品には必ず主題があつり」、「a、作者が意図した主題」と「読者が読みとる主題」とが存在する場合」と「b、読者が読みとる主題」が存在する場合」の二つの場合が考えられるが、基本的に日次の記録である漢文日記に認められるとしたならば、専らbのパターンであり、漢文日記の作者に、自分の日記を文学作品にしようという「文学意識」は無かつたとされる。

さて、以上のような経緯を踏まえて『略集』の主題について考えてみる。『略集』は、一個の作品としての体裁(完結性)を保持しているが、前掲の如く義堂が実質的に記したのは、貞治六年(一一三六七)から嘉慶二年(一一三八八)三月十一日条の前半まで(分類三、死に臨んで擲筆したのである)。

義堂には、中国留学の経験が無い。禪僧としての義堂の生涯を、大まかに区分すると、「A京都修行期」「B関東在住期」「C京都市大寺院住持期」とでもなろうか。『略集』の主題に言及して行く際、まず各時期における主題を明らかにした後、それらの底辺を流れる大きい主題(作品全体の主題)を発見するのが順当であろう。特にB期とC期とでは、義堂を取り巻く環境も、また彼の社会的立場も大きく異なり、それが自ずと日記の記事内容や文体に影響を及ぼすと考えられる。これは、先生が、『看聞日記』の主題を追究された時に用

いられた手法と同じである。ただし、A期の記事は極端に少なく、今回は、主題を導くには至っていない。

### 三 関東在住期の主題——仏法の衰微や禅林の墮落に対する危懼と、法灯を護持せんとする使命感——

『略集』における、義堂の関東在住期の記事は、春屋妙葩の命令を受けて関東に赴いた延文四年(一一三五九)八月条から、板輿にて相陽を出発した康暦二年(一一三八〇)三月三日条あたりまでである。義堂の年齢は三四く五六歳、住院歴等は本稿の冒頭に記した通りである。先に稿者の考えを述べると、この時期の『略集』には、「仏法の衰微や禅林の墮落に対する危懼と、法灯を護持せんとする使命感」とが描かれているように思う。例えば、『略集』応安三年(一一三七〇)正月七日条から抄出する。

夜の坐禅に臨み、立ちて篆香六寸を刻み、以て永代の家規と爲す。坐罷り、諸道人と方丈に会して茶を点じ、因りて説く、「今時の仏法淡薄にして、諸方、皆、名利闘争の場と爲る。本寺は宜しく坐禅を以て務と爲すべし。飢寒甘苦、古人、生死の爲に皆、之を忘る。青銚和尚、南陽国師の風葉擁趺、楊岐の満床雪霰、是れ其の様子なり。千万諸公、今より去、生死を以て念と爲せ。漸々修行せば則ち他の古人と肩を齊しくすること、未だ晩からず」と。(以下略)

夜の坐禅を終え、義堂が諸々の道人に説いている場面である。「今

時の仏法淡薄にして」というくだりでは、最近の禪僧が仏道修行を怠けて（禪林の墮落）、そのせいで世間の仏教熱が冷め、仏教が衰え滅びつつあることを述べていよう。『略集』には、「是を以て廢俗、益々盛んにして、仏法衰微す」（応安三年二月二十五日条）とか「動行精進せば則ち道業を成就し、懶墮懈怠せば仏法滅亡す」（応安八年五月十九日）などの表現が散見できる。

義堂は仏法の衰微した理由を、諸方皆が「名利」を追求したからとしている。『略集』を繙くと、以下のような文章も見出せる。

六月一日 慶、一僧を帯し来る。洞下の人なり。改名を求むれど、余、肯んぜず。其の人に對して云く、「凡そ今時の改名は、多く名利の爲なり。仏法の衰微、皆、是に由り、然に致る。

（以下略）

（応安三年六月一日条）

そして、斯くの如き現状の打開策として、義堂は「本寺（瑞泉寺）は宜しく坐禪を以て務と爲すべし」と強く主張する。坐禪の奨励は、『略集』のこの期に、しばしば説かれているところである。例えば、  
応安三年九月晦日条を挙げる。

晦日 開山忌。禪より起ち、衆に告げて曰く、「今夜、四更、坐禪に僧無し。凡て禪院は大小と無く、坐禪を以て務と爲す。

況んや当寺は先師の開基にして、専ら坐禪を爲すなり。諸兄弟、各々安禪靜慮せば、則ち他日出で知識と爲り、自利々他、其の益、莫大なり。特に是の日は例に随ひて長坐し、宜しく自策すべし。余の言を待つ母れ」と。

【注】夢窓が示寂したのは、観応二年（一三五二）九月晦日。

一見すると、「釈迦に説法」のような提唱であるが、それ程、当時の禪林に墮落、頹廢のムードが漂っていたのであろうか。『略集』を通説すると、禪僧が兵器を所持していたり、世俗に流されて行く様子を、義堂が叱責したり、悲嘆する記事に頻繁に出会う。

応安三年正月七日の記事に戻る。これは『略集』の文体的特徴の一つとして掲げることができるかも知れないが、『略集』には「今時」という語がかなり目立ち、しかもネガティブな内容の記事（仏法の衰微、禪僧の世俗化等）において用いられている。ここに義堂の老婆心を読み取ることも可能と思うが、それ以上に、禪宗を取り巻く現状に対する並々ならぬ危機感と、古人が伝えて来た法灯を次世代まで守り抜こうとする強い意志力とを感じずにはいられない。南陽慧忠をはじめとした古人は、生死事大を明らかにするために飢寒甘苦に耐えて修行した。諸君も今から後、生死究明の心を以て懸命に修行すれば、古人に肩を並べることができる——義堂の後進指導の眼差しは、厳しい中にも暖かみを含んでいる。夢窓派の教線拡大の使命を帯びて関東に下向した、義堂の切実な実践でもあった。

#### 四 京都大寺院住持期の主題

——権力に拘泥しない態度——

京都大寺院住持期の記事は、彼が相陽を発して入浴した康暦二年三月十七日条から巻末までである。義堂の年齢は五六〜六四歳（享

年、建仁寺や南禅寺等の大寺院の住持を勤める傍ら、禅林の主導者という立場上、上級武士や貴紳と交流する頻度が増した時期でもある。この時期の『略集』は、「將軍足利義満との交流日記」と言い換えても良いであろう。足利義満（一三五八—一四〇八）は頻繁に『略集』に登場し、あたかも義満をして日記を進行せしめているかの如くである。義満は禅林の外護者であったので、当然と言えば当然である。試みに至徳（一三八六）三年二月三日条から抄出する。

二月三日 府君を奉迎す。官伴は二条拱政殿・日野兄弟・坊城秀長・御子左、御剣は管領玉堂、僧伴は性海・太清・空谷・無求・相山等なり。倭漢聯句一百句罷り、余、姑らく座を去る。

何人の白す所か知らざれど、府君、余の帯の年を経て、段々結統せるを聞き、互ひに相交易せんと欲す。所謂帯引なる者なり。余、辞すれど、君、必ず相換へんと欲す。蓋し府君、余の帯と引き換へんと欲するや、座中、皆、和会す。然るに余、独り知らず。紙を切り、各帯端を繋ぎ、両々曳き出す。先づ性海と日野と相当たり、餘りも皆、兩人、相引く。末上に紙を探れば、果たして君と余と相合ふ。君、先づ御帯を出し畢はり、余に帯を出さしめんと欲す。余、固辞すること再三なり。太清、余の左偏に在りて、手を以て余の帯を曳き出す。是に及び、君、御帯を余に賜ひ、而る後、余の帯を乞ふ。余、亦た辞す。清、復た余の帯を奪ひ、直ちに君の手に伝ふ。君、余の帯を繋げ、普く座人に示す。大笑一場。遂に辱なくも余の帯を服す。（以下略）

和漢聯句会が終わつた後、「帯引き」が行われた。「帯引き」とは、多人数が集まつた席で、各自の帯の端にこよりを結びつけ、これを引いて当たつた帯を、自分の物として交換する遊戯である。ただし、この日行われた帯引きは、所謂「遣らせ」であつた。義堂の知らないところで、義満の計らいによつて義満と義堂の帯が交換されるように仕組まれていたのである。と、いうのも、義満は、義堂の帯が古くなって、次々と繋ぎ合わせているのを聞いて、帯の交換を申し出たのであるが、義堂に断られたためである。帯引きの経緯の詳細は、さて措いて、「大笑一場」とあるように、場の雰囲気は非常にリラックスして、和氣藹々としている。

『略集』を見ると、義満は、義堂らと一緒に道話や坐禅をする他、漢籍の講学や宗教上の工夫、相国寺の建立などについて、幾度となく義堂に尋ねている。そしてその都度、両者の間の遣り取りは、終始和やかであつた。これには、夙に白井信義氏も「この『空華日用工夫略集』などにみる義満のいかにも純真な信仰と、当時の政治面にあらわれた傍若無人の態度との相違には甚だ理解に苦しむものがある」（人物叢書『足利義満』・二二三頁）と疑問を呈しておられた。ただし、相手が権力者（將軍・外護者）であるからと言って、必要以上に媚び諂うような態度を、義堂に認めることはできない。義堂と義満の蜜月状態は、前出の帯引きに纏わるエピソードからも察せられるように、義堂の控え目な性格（謙遜・謙譲）に起因するのが大きいのではないだろうか。義満も「君、笑ひて曰く、」義堂の性、

毎事謝遜す。今、法衣と雖も、亦辞す」と(至徳二年三月九日条)と評しているし、義堂自身も「余、少きより稟性謝調にて、超進を喜ばざるなり」(嘉慶元年七月十九日条)と自白している。禅林と幕府の關係を考慮すると、義堂が義満らとの付き合いを避けることは不可能と言つてよい。むしろ、そのような環境や社会的立場にありながらも、権力に拘泥することなく、禅林の発展に寄与したことを特筆するべきではないだろうか。なお、この期の『略集』にも、筆致は地味ながら、坐禅を推奨したり、禅僧の世俗化を嘆く記事が散見される。

## 五 『空羣日用工夫略集』の主題——義堂周信の禅僧と

しての真摯な生き方、結びにかえて——

以上、『略集』の関東在住期の主題を「仏法の衰微や禅林の墮落に對する危懼と、法灯を護持せんとする使命感」、京都大寺院住持期の主題を「権力に拘泥しない態度」と読み解くに至った。前者は禅林内部、後者は禅林外部に對してのものであるが、環境や社会的立場が変化しつつも、義堂は、禅僧としての生き方を追究し、燃焼していったように推察される。両者を統合すると、『略集』の主題は、「義堂周信の禅僧としての真摯な生き方」とでもなるうか。勿論、これは、位藤先生が言われるところの「読者が読みとる主題」である。『略集』応安四年正月二十六日条には、次のような文章がある。

余、困りて話す、「年譜は則ち人々一生の中、毎日の行住坐臥の

際に作る所の事なり。日本、之を日々記と謂ふ」と。余、乃ち曰く、「日用の工夫をば毎日自ら記し、自ら好悪二事の何に多く、何に少なきかを檢し、此を以て自ら警策すと云々」と。

元来、注目されて来た箇所、玉村氏は「ち年譜編纂の基礎としての日記、人に見せる爲の日記を作製せんとしふ意識が、い事が察せられる」、蔭木氏は「自分自身の警めとしたい」という箇所を、『略集』の執筆目的と指摘される。なるほど他の箇所にも「故に是の時に於いて之を記し、以て自ら警め、怠らざらしめんことを要す」(貞治六年十月十三日条)や「故に特記して以て自ら警め、且つ後の見る者に告げて、古人の出処、容易ならざりしを知らしめんと云ふ」(応安五年十一月十日条)という記述がある。これらに拠れば、義堂は『略集』を記す際、「作者が意図した主題」を有してはいたことはないが、自己警策の意識を持ち、合わせて読者をも想定していたことが、『略集』の読者(稿者)に「義堂周信の禅僧としての真摯な生き方」という主題を読みとらせるに至った、と稿者は考える。ただし、「この自己警策の目的は貫徹しておらず、時に稀薄になっているのではないか」「日々の日記に自己反省の語が見えぬ」との厳しい意見もあるが、これは、基本的には日次の記録であり、仮名日記に見るような自照性に乏しい漢文日記の性格上、致し方無いところであろう。義堂は、日々の出来事を記録するという行為を通じて、自己を省察し、自己のいましめとしていたはずである。

——あさくら・ひとし、広島商船高等専門学校講師——